

# 信濃毎日新聞

1873年(明治6年)創刊  
 夕刊  
 本社 長野県長野市南區町 電話 286-3111  
 長野支社 長野市南區町 電話 286-3333  
 東京支社 東京都千代田区千代田 電話 25-2151  
 大阪支社 大阪府大阪市東区 電話 25-2153  
 ©信濃毎日新聞社 2009年

やまもと みえ  
**山本 美恵さん** 伊那市出身

**山谷でホスピス運営**



## 最期 安らかな気持ちで

新 **しなの人** 176

屋上にある礼拝堂に幾つも並ぶ遺影。昔、穏やかな笑顔を浮かべている。二人二人の物語がわたしの手物です。東京・山谷のホスピス「きほろのいえ」の「おかみさん」になり、六年余。これまで九十人を見送ってきた。多くの遺骨に引き取り手がな。郡内は高木の足を踏んでいたお墓を昨年十二月、故郷の伊那市に親類らの協力で遷すことができた。「わたしの大好きな仙丈女房を尋ねるのうれしい」。現在、五

十歳。はは美みの奥には、若いころから生と死に向き合ってきた強さにもじむ。伊那弥生女高高校二年の時、親父が病気で急逝した。部活の片付けを二緒にしてくれたり、寒いとカーディガン

を貸してくれたりする優しい子だった。「世の中には親を亡くした人や障害を負った人もいる。わたしは恵まれてきた。人を助ける仕事に就きたい。生前の言葉が忘れられなかった。遺志を継ぐように看護師になった。郡内の病院に勤務し、医療系出版社に転職。看護学生用雑誌の編集者として、後輩たちの学習を助ける仕事に打ち込む中、今度はずっと好きだった男性が事故で他界した。後を追いたい。衝動に駆

られたが、故郷の両親を思うときがあった。「死ぬらむなるのか」人は待て生きるとか。考え続け、ふらりと「ホスピスボランティア」講座に参加した。そこで夫の雅基さん(仮)と出会った。「ホームレスのホスピスをつくりたい」と夢を明かされた。雅基さんは、支援活動を通じ、末期がんの人知れず死を待つ野蠻者に心痛めていた。思いに共感し、二〇〇三年に結婚。郡内で場所を探し「迷惑施設」と断られ縛けて

行き着いたのが山谷だった。台東、荒川区にまたがり、日雇い労働者らの簡易宿泊所が立ち並ぶ地域。身着りのない高齢者が流れ着く場でもあった。「このおじさんたちのいすみかにもなれば」。銀行などから二億円近く借り、同年十月に四階建て施設を選った。用意した十二室は開設から入居者が殺到。山谷のほか、行き倒れて保護され、孤独死を恐れられアパートを追い散らした。貴未期がんなどを抱え、福祉事務所などの紹介でやって来た。目撃自覚と人は言うが生い立ちや経済情勢などで自分ではどこにもならなかった境遇が重なり、余命二年で入った五十八歳の男性。嘔吐がふと音が出すと暴れた。夜は寝たが、手までとどろき、幼児のように従った。頭をなでると寝る。嘔吐を立止めた。如くして手子に出さず、山谷などを転々としてきた。「子どものころ受けられなかった愛情を吸い取っているかのようだった。最後は「もう少し生きたい」と書いて見せ、昨年十二月に逝った。施設長の雅基さんと職員ボランティアと養育的雰囲気大切に。入居者の健康状態をみるのに看護師経験が生きている。運営は入居者の生活煩雑と寄付金で賄う。行政の補助はない。常に運営費が、赤字が続く。それでも「この苦しい人生で一人入居者に最期は人を憎まず、安らかな気持ちで旅立っていくのもいいんです」。

「最初はお話を聞いてくれないうち、徐々に雑談がなになっていきました。陽光が差し込む談話室では入居者との会話を軸に「東京・台東区清川の「きほろのいえ」